



# 教員展

〔学科教員による作品展〕

## 【プラザ展】

会期 2024年8月2日(金)～4日(日) 10:00～18:00

場所 四国大学交流プラザ3Fキャンパスギャラリー

(徳島市寺島本町西2丁目35-8 電話088-602-4858)

## 【学内展】

会期 2024年8月5日(月)～24日(土) 9:00～18:00

(但し、10～18日は休館)

場所 四国大学書道文化館1Fギャラリー

(徳島市応神町古川) 電話088-665-9705

(題字揮毫：辻 尚子、背景：吉野川橋)

四国大学文学部書道文化学科は、「書道に親しむ」から「書道を楽しむ」、さらに「書道を活かす」へと発展させ、書道文化の専門的探求を目指すユニークな学科です。

書道文化学科の学生たちは、書道の「技術」「歴史」「理論」などを探求していく中で書道文化を理解し、また書の作品制作を通して自己を表現することを学ぶと共に、新たなことを創造する発想力を身につけていきます。学生が身につけた力は書道以外の分野でも応用範囲が広く、卒業後には様々な職業の中でそれを活かして活躍しています。

私たち教員も、教育と研究の責務を果たすべく日々取り組んでいます。この展覧会は、学科の専任と非常勤の教員が書法研究発表の場として年一回開催し、今年で38回目を迎えました。時期をずらして2会場で開催します。なにとぞ御高覧のうえ、御教示賜りますようお願い申し上げます。(出品者一同)

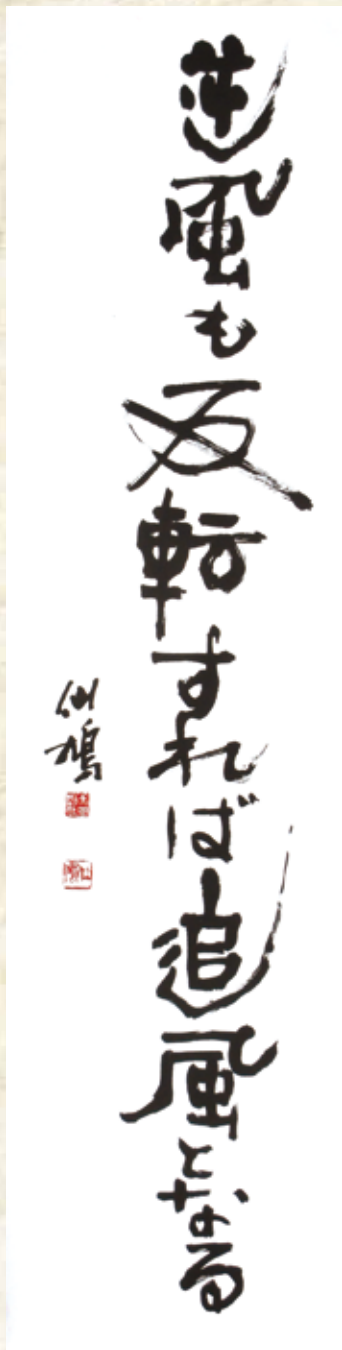
太田剛(仙鳩)

「慮」



140×76

「自作の言葉」(破体書)



137×35

逆風も反転すれば追風となる

「Open the door」



本紙14×28 箱内部本紙21×31

辻

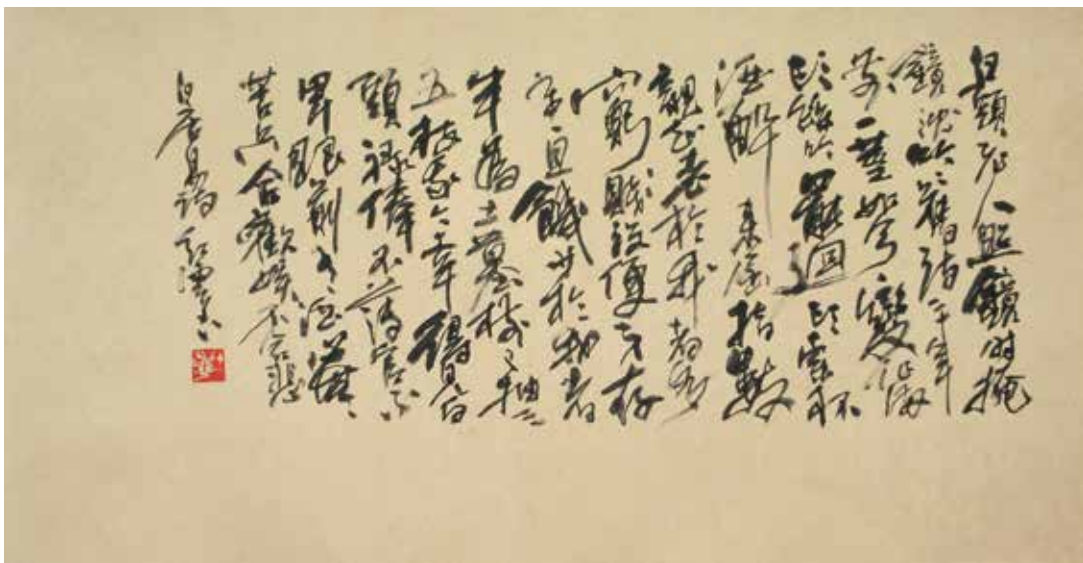
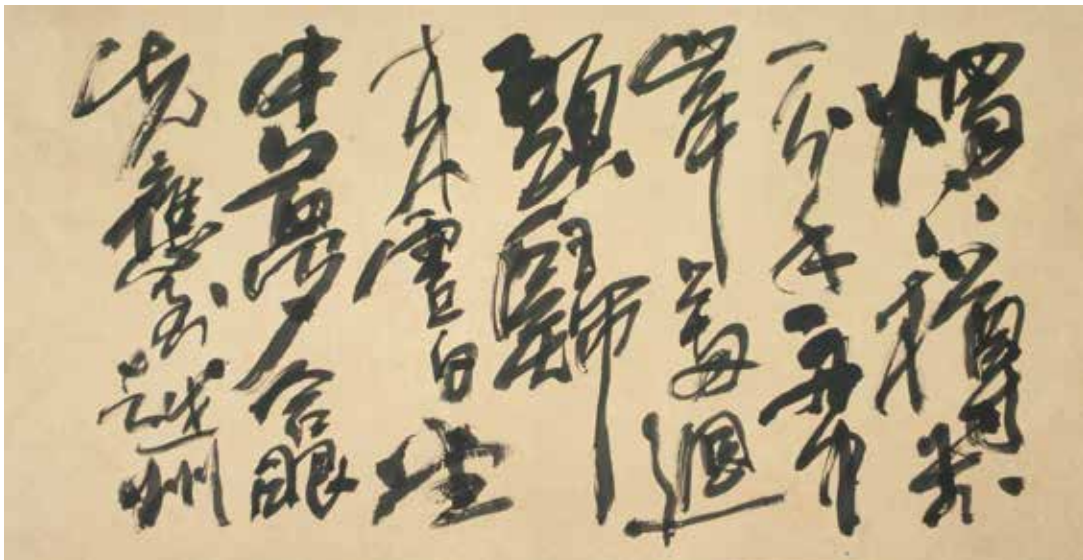
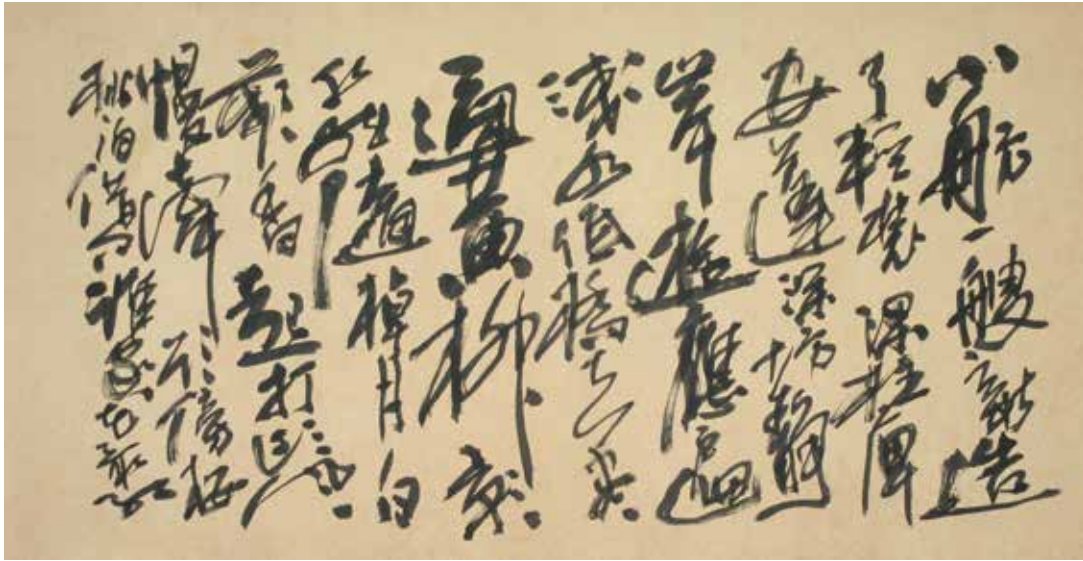
尚子(紅雲)

白居易詩

小舫一艘新造了  
輕裝深柱庫安蓬  
深坊靜岸遊應遍  
淺水低橋去盡通  
黃柳影籠隨棹月  
白蘋香起打頭風  
慢牽欲傍櫻桃泊  
借問誰家花最紅

燭下樽前一分手  
舟中岸上兩迴頭  
歸來虛白堂中夢  
合眼先應到越州

白頭老人照鏡時  
掩鏡沈吟吟舊詩  
二十年前一莖白  
如今變作滿頭絲  
吟罷迴頭索杯酒  
醉來屈指數親知  
老於我者多窮賤  
設使身存寒且饑  
少於我者半爲土  
墓樹已抽三五枝  
我今幸得見白頭  
祿俸不薄官不卑  
眼前有酒心無苦  
只合歡娛不合悲



森<sup>もり</sup>

上<sup>かみ</sup>

洋<sup>ひろ</sup>

光<sup>みつ</sup>

(洋光)<sup>ようこう</sup>

「光臨」



225×83

渡<sup>わた</sup>

邊<sup>なべ</sup>

周<sup>しゅう</sup>

一<sup>いち</sup>

(星舫<sup>せいぼう</sup>)

「煙外有鐘聲」



3×5

「趨然」



2×5

「梅華夢」



「吾道尊」



3×3



3×3

田たノの岡おか  
大だい雄ゆう

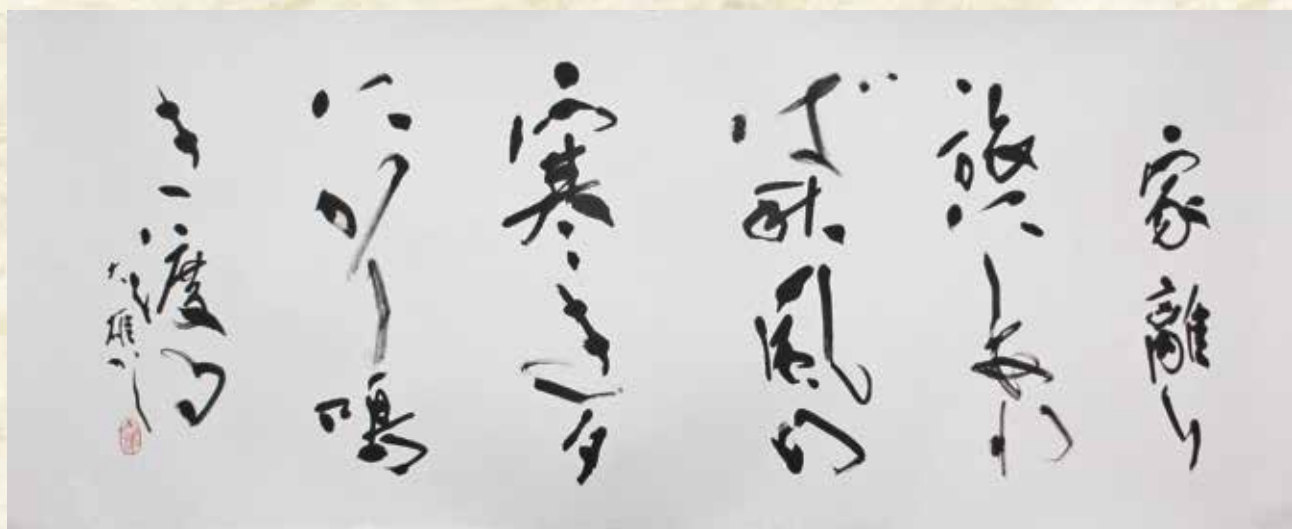
[Portable Art Museum tsuki]



本紙4×1.5

おぼろ

「夕」



70×175

家離り  
旅にしあれば  
秋風の  
寒き夕  
にかり鳴  
き渡る

黒<sup>くろ</sup>  
田<sup>だ</sup>  
賢<sup>けん</sup>  
一<sup>いち</sup>

「すずめ」(長塚節の句)

わか草のはつかに萌ゆる庭に来て雀あさりて隣へ飛びぬ



本紙112.5×29.5

川<sup>かわ</sup>  
尾<sup>お</sup>  
朋<sup>とも</sup>  
子<sup>こ</sup>

「臨懷素草書千字文」

天地玄黃 宇宙洪荒 日月盈昃 辰宿列張 ···



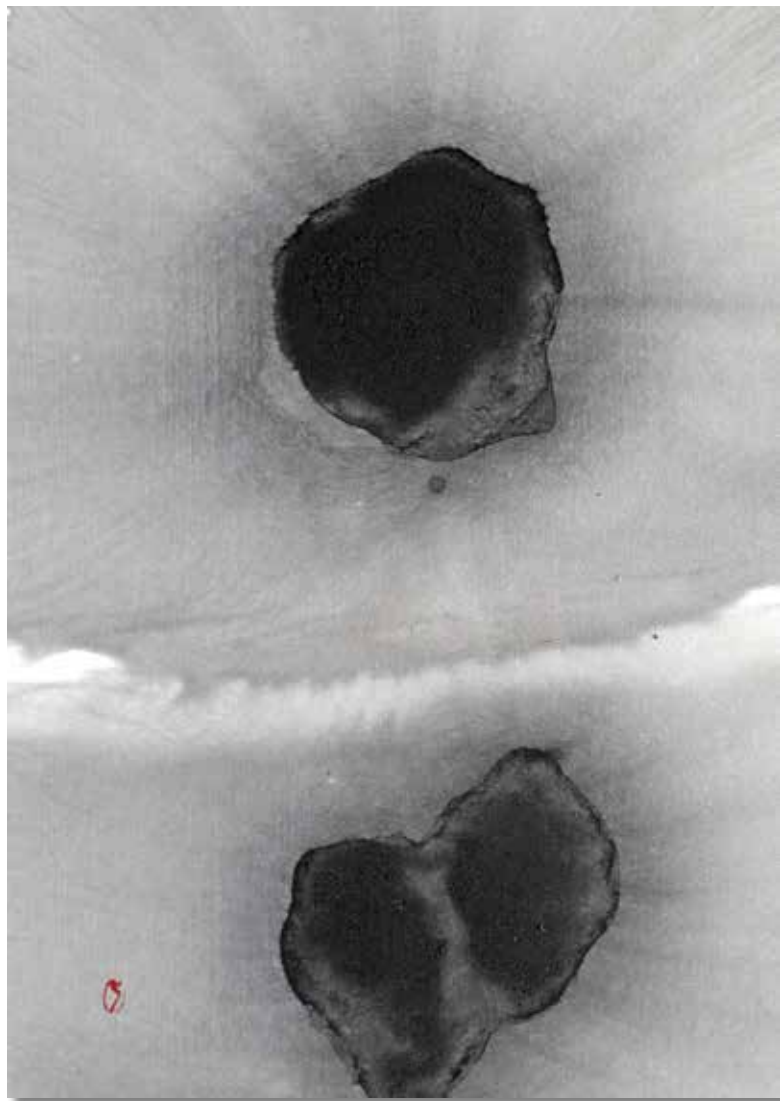
33.4×24.3



上<sup>う</sup>  
田<sup>た</sup>

普<sup>ひ</sup>  
し

「沈黙」



30×21

鹿<sup>か</sup>  
倉<sup>くら</sup>  
壯<sup>たけ</sup>  
史<sup>し</sup>  
(碩齋<sup>せきさい</sup>)

「竜虎相搏」  
りゅうこごころはく



136×35

黒くろ  
木き  
知とも  
之ゆき

〔桃〕



一食可得千萬壽

小  
竹  
正  
高

「宙掴む」(山口誓子の句)



本紙33×24

阿波踊  
両手差し上げ  
宙掴む

松村茂樹

『書の語られ方日本篇』あとがきより

ただ、中国の正鋒を受け入れた人も日本人であることに変わりなく、必ずと言っていいほどその書論に日本人らしさがある。日下部鳴鶴が蔭では王羲之の書法で書いたことや、長尾雨山が草行楷に王羲之の書法で書くことを提唱して、包世臣や趙之謙に魅せられ、中国書法にどっぷりと浸かっていたように思われる。西川寧も、次のようなことを述べている。「書は文字という素材を通じて、自分の核心にすわったところをあらわすものだ」と私はおもっている。趣味や情緒は表現を左右するが、その自体書(脱字)の第一義ではない。そしてその表現の風味は菓子でいうなら塩煎餅のようなものだ(「変貌する現代の書」)。「塩煎餅」に喩えるのは、おそらく日本人だけであろう。

『書の語られ方日本篇』あとがきより  
松村茂樹撰并書

33×24

ただ、中国の正鋒を受け入れた人も日本人であることに変わりはなく、必ずと言っていいほどその書論に日本人らしさがある。日下部鳴鶴が蔭では王羲之の書法で書いたことや、長尾雨山が草行楷に王羲之の書法で書くことを提唱していたことは本篇中で述べたが、包世臣や趙之謙に魅せられ、中国書法にどっぷりと浸かっていたように思われる。西川寧も、次のようなことを述べている。「書は文字という素材を通じて、自分の核心にすわったところをあらわすものだ」と私はおもっている。趣味や情緒は表現を左右するが、その自体書(脱字)の第一義ではない。そしてその表現の風味は菓子でいうなら塩煎餅のようなものだ(「変貌する現代の書」)。「塩煎餅」に喩えるのは、おそらく日本人だけであろう。

『書の語られ方日本篇』あとがきより  
松村茂樹撰并書

## 【阿波ゆかりの書人作品 紙上展】

四国大学 書道文化センターでは、近世から近代にかけての阿波と淡路に関係の深い書人の作品を中心に収集しています。この時代の地方の書道を担った学者・僧侶らは、既に名前を忘れられていることの方が多いのですが、書の技術は高く個性的で、近世・近代の日本書道史を考える際の重要な資料になります。行草の漢文や変体仮名の作品が多く、現代人には読みにくく経年劣化も目立つため、ともすれば、世代交代の折に廃棄される危険があります。翻刻はまだ間に合っておりませんが、教員展の際に、書人の履歴と共にその一部を展示し、地域の皆様や学生達にも鑑賞をしていただくことで、書人の名を記憶に留め、次代に伝えていきたいと考えています。

### 芳川 顕正よしかわけんしょう

天保十二〜大正九（一八四一〜一九二〇）八十歳

阿波国麻植郡山川町川田北島の医師、原田民部の四男として生まれた。幼名は賢吉、号は越山。のち別家を建て芳川を姓とした。有井進齋に学び、長崎で医学・英学を修め、さらに鹿児島にも遊学した。明治三年（一八七〇）、大蔵省出仕となり、参議伊藤博文に従って渡米し文物・制度を視察。翌年帰朝し、大蔵省紙幣頭となった。明治十二年（一八七九）、英国に行き、翌年帰朝して東京府知事・内務大臣・文部大臣などを歴任し、「教育勅語」の発布にも関与した。その後も司法大臣・逓信大臣・枢密院副議長・国学院大学長などを歴任し、伯爵となり、詩書をよくした。



# 新居湘香

嘉永二〜大正六（一八四九〜一九一七）六十九歳

徳島藩儒だった新居水竹の次男。名は敦二郎。明治維新後に元老院中書記生となり、政府に出仕。かたわら自由民権運動の結社である徳島の「自助社」の幹部社員として活躍していたが、通論事件によって罪に問われ退官した。禁錮二年の後、教育界に入り、明治十四年（一八八二）、徳島中学校校長となり、四年間在勤した。退職後、北海道庁に勤め、後、東京府庁第三課・貴族院事務局・大蔵省調査局などに務め、再び北海道に渡って札幌農学校の漢学講師となり、北海道の高等教育充実に尽力した。蜂須賀侯爵家の囑託も勤めた。詩書をよくした。



# 泉智等

嘉永二〜昭和三（一八四九〜一九二八）八十歳

麻植郡鴨島殿郷の人。幼名は直蔵、号は物外。十二歳で板野の莊嚴院硯道について出家得度し、真猛と称した。柴秋村に漢籍を学び、高野山・京都智積院で仏教学を究めた。その後真言宗布教師として全国を巡錫した。仁和寺門跡などを経て真言宗管長となった。書画をよくした。



# 出品目録

太田 剛 (仙鳩) <教授>

「慮」  
「自作の言葉」(破体書)  
「薬食同源」  
「名位瀑布詩」(細川林谷)  
「Open the door」

辻 尚子 (紅雲) <教授>

白居易詩  
「守破離」  
『方丈記』の一節 (鴨長明)  
松尾芭蕉の句

森上 洋光 (洋光) <教授>

「光臨」  
「臨 毛公鼎銘」

渡邊 周一 (星筋) <准教授>

「列子語他」  
「缶廬詩他」  
「蘇軾語他」  
「帰馬放牛」

田ノ岡 大雄 <講師>

「Portable ArtMuseum sawa」  
(松尾芭蕉の句)  
「Portable ArtMuseum www」  
(柴田佐和子の句)  
「Portable ArtMuseum tsuki」  
「夕」(よみ人知らず)  
「源氏物語作中歌一幻一」(紫式部の歌)

黒田 賢一 <客員教授>

「すずめ」(長塚 節の句)

川尾 朋子 <特認教授>

「臨 懷素草書千字文」

上田 普 <非常勤講師>

「沈黙」

鹿倉 壮史 (碩齋) <非常勤講師>

「竜虎相搏」

黒木 知之 <非常勤講師>

「桃」

小竹 正高 <非常勤講師>

「宙掴む」(山口誓子の句)

松村 茂樹 <非常勤講師>

「『書の語られ方 日本篇』あとがきより」  
(自作)



〒771-1192 徳島市応神町古川

四国大学

学際融合研究所 言語文化研究部門

TEL 088(665)1300

FAX 088(665)8037

ホームページ

<https://www.shikoku-u.ac.jp/education/gakusai-yugo-labo/lc-dep/>